



保育所における心理職による多職種連携の試み

— 保育士の変化についての調査結果 —

藤原 朝洋(美樹和会) 吉田 かける(美樹和会) 高田 莉恵(美樹和会)
尾崎 将充(美樹和会) 松田 采実(美樹和会)

【目的】

○ 保育所において、保育士、看護師、栄養士等を中心に多職種連携が行われている。

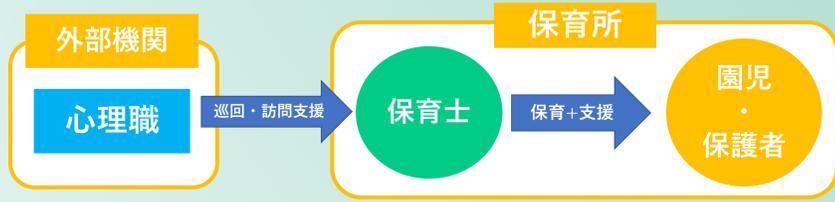
心理職(臨床心理士/公認心理師)との連携に関して、巡回相談・保育所等訪問支援事業など外部の社会資源の有用性についての研究は存在している

心理職が保育所で常勤として働くことは極めて稀であり、心理職を含む保育所内の多職種連携に関する研究が少ないと思われる

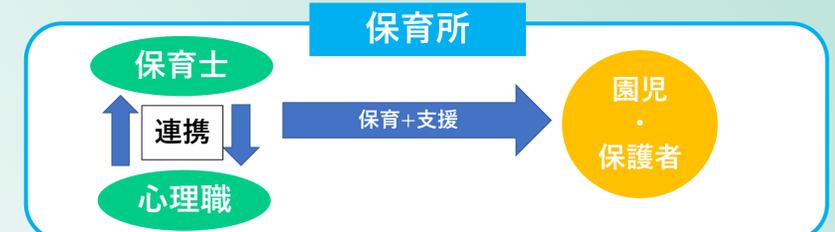
⇒心理職の保育所内部での働き方の実践モデル確立をしていく必要がある

◎保育所での心理職の働き方のモデルの揭示し、「心理職－保育士」の多職種連携の試みが保育士にどのような変化をもたらすのか検証する

従来型の支援



美樹和会の試み



【方法】

法人概要: 保育所と児童館,学童保育所を運営する社会福祉法人内の保育所5施設が対象

多職種連携に至る経緯: 2019年度より常勤心理士1名の雇用,2021年度に3名の常勤心理士を追加雇用した

主な実践内容: Table 1参照

調査実施の概要: 保育所に所属する保育士135名を対象にgoogleフォームで作成した質問紙に回答を求めた。回答数は63件,回収率は46.6%。

質問項目: ①属性に関する質問(5項目),②保育士の変化に関する項目(6項目),③職員の関係性に関する項目(1項目),④子どもの変化に関する項目(2項目)

Table 1. 常勤心理専門職の主な業務

<p>①観察と助言 (観察記録作成)</p> <p>園長もしくは担当保育士から対象児の気になる点について情報を受け取る。午前中から給食までの時間に行動観察や参与観察に入り,観察記録をまとめる。午睡の時間に担当保育士に観察記録の説明と対応についての検討をおこなう。</p>
<p>②個別の支援計画作成サポート</p> <p>個別の支援計画の作成対象となった園児について,観察に基づく課題と目標の整理をおこない担当保育士に説明する。担当保育士はそれを基に個別の支援計画を作成し,心理職は作成された個別の支援計画に助言する。</p>
<p>③対象児についての支援会議の実施</p> <p>各クラスごとに支援会議を月に一度開催し,これまで観察対象となった対象児及び,新たな「気になる園児」についての支援のあり方を話し合う。</p>
<p>④保護者面談への同席</p> <p>保護者より保育士に発達面について相談があった場合は,「法人内に心理職がいて,発達について助言してもらうことができる」と伝え,心理職の面談同席を提案する。</p>
<p>⑤スクリーニング的観察</p> <p>発達の支援ニーズの有無を確認するため,2歳の誕生日前後にM-CHATを参考にした観察を行っている。</p>

【結果】

Table 2. 質問紙結果

No.	質問内容	回答率
4	気になる園児の有無	はい (82.5%)
6	見方の変化	はい (94.2%)
回答例: 複数の視点で見る意識を持つようになった/気になる子どもがどのような意図で動いているのか少しわかるようになった/子どもの特性や,子どもが見ている世界を想像しやすくなった/ポジティブに捉えられるようになり,子どもに対して余裕をもって見ることができた/少し客観的に見れるようになりました/子どもの情緒面をより意識するようになった		
7	関わり方の変化	はい (94.2%)
回答例: その子に応じた声かけの仕方が変わった/偏食に対しての対応が変わりました/子どもの行動への許容範囲が広がった/どのように対応するかのお手本を見せてもらった時は,真似ながら取り組むようになった/出来ているところを見つけ,褒めることを増やしている/関わり方が難しかったのが,言葉掛けなどもしやすくなった/迷いのない関わり方になった/声のかけ方を以前より意識するようになった		
8	意欲の変化	はい (78.8%)
回答例: 関わりの難しい子どもと信頼関係が築けるのが嬉しく,モチベーションになっている/関わり方を考え行動することで,自分もおおらかな気持ちで接することができている/悩んでいたことが,すっきりして保育にのぞめます/アドバイスに沿って関わりや見方を変えることで子どもの様子が見え,発達を促す成功体験をすることでモチベーションがあがった/次回の観察までに少しでも成長している子どもの姿を見せたいと思った/その子に対して,より良い保育ができるように努力したいと思った		
9	自信の変化	はい (61.5%)
回答例: ぼんやりとした不安が軽減した/安心感に繋がりました/今続けていることが間違いではなかったと思えた/心理士の先生の後押しが出来たので,迷いが軽減された/自分の対応が適切であったと確信した/この対応で良かったんだと安心感が持てました/対応に悩んでも相談をしながらチャレンジができるという面で自信に繋がる部分はあります		
10	学習頻度の変化	はい (54.0%)
回答例: 話している中で知らないことや専門的な話を聞き,学びたくなり本を買って読んだ/動画を見たりして類似することを検索するようになった/書籍やネットでの学習時間が増えた		
11	大変さの変化	はい (34.6%)
回答例: 以前より余裕が出てきたので保育がしやすくなった/気になる子について,保護者に伝えていくことの大変さを感じる/正しい関わり方が分かり少し楽になりました/書類関係が少し増えました		
12	連携	はい (88.5%)
回答例: 話し合いが増えた/担任間でそれぞれ意識して関わろうとし,気になる事などは報告しあっている/サポート後の成長を伝え合ったり,喜びを伝え合える時間が出来た/この子にはこういう対応や関わり方をしてみようという意見交換をする機会ができた/定期的な支援会議を行うことにより,職員全体で子どものことを考えていける雰囲気やまとまりを感じる		

【考察】

○ 保育士の学習態度にポジティブな変化(54.0%)をもたらすことや,見方の変化(94.2%)や関わり方の変化(94.2%)など保育士の資質向上につながることが示唆された
⇒心理職のアセスメントとそれに基づく支援という見方や関り方の提示により,保育士が,自ら保育の中で実践し,必要に応じて知識や情報を積極的に得ようとしていることが確認された

○ 個別支援計画や観察記録を資料として多職種で話合う機会を設けることで,目標/方針をクラス関係者で共有・醸成することが出来た
⇒共有により保育士-保育士間においても高い頻度の話し合いにつながり,連携が促進された(88.5%)という認知につながると考えられる。

○ 意欲の変化(78.8%)と自信の変化(61.5%)について「安心感」や「不安の軽減」などキーワードが多く確認された
⇒悩みや不安の軽減は保育士の安定した態度やかかわりにつながり,資質向上だけでなく,かかわる子どもも全てに対してポジティブな影響があると考えられる